

令和 2 年 5 月 30 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05555・19K20766

研究課題名（和文）フランス現象学を背景とした後期レヴィナスの人間観の歴史的・体系的な研究

研究課題名（英文）Historical and systematic study on Levinas' conception of humanity in light of French phenomenology

研究代表者

平岡 紘（HIRAOKA, Hiroshi）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教

研究者番号：00823379

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、第二次戦後のフランスで活躍した哲学者エマニュエル・レヴィナスが提示した人間をめぐる思索の内実と独自性を、同時代のフランス現象学に照らして考察した。本研究は第一に中期著『全体性と無限』において人間の自己性の形象として導入される「自己のもとでの現前」という概念の内実を解明し、第二に、人間の理性をめぐるレヴィナスの思索の内実を考察することを通じて、記号をめぐる彼の分析がどのように彼の音の現象学と連関しているかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来のレヴィナス研究において注目されてこなかった「自己のもとでの現前」という概念および記号をめぐるレヴィナスの分析に着目し、その意義を明らかにした点に学術的意義がある。また、近年、再生医療技術や人工知能の発展により「人間であるとはどういうことか」という問いが改めて喫緊の課題として現れているが、本研究の成果は、この問いに対して一つの哲学的な応答を提示するための基盤となる知見である。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the conception of humanity of Emmanuel Levinas, a famous French philosopher after the Second World War, in light of French phenomenology.

First, we elucidated the signification of Levinas' concept of "presence chez soi", which is introduced as a figure of human ipseity in "Totality and Infinity".

Then, by clarifying the signification of Levinas' conception of human reason, we revealed how his analysis of sign is related to his phenomenology of sound.

研究分野：哲学

キーワード：レヴィナス 現象学 自己性 人間主義 記号 フランス哲学

1. 研究開始当初の背景

近年、再生医療技術や人工知能の発展により、「人間であるとはどういうことか」という問いが改めて喫緊の課題として現れている。第二次大戦後フランス語圏において活躍したエマニュエル・レヴィナスは、ナチスによって親族を虐殺されるなど 20 世紀の数々の悲惨をみずから体験しながらも、人間性の意味について考え続けた、もっとも重要な哲学者の一人である。とりわけ 1960 年代、構造主義によって主観性や人間の特権性が問い質されるようになるが、そうした時代の思潮に対抗してレヴィナスは一貫して人間の主観性を擁護し続けた。心身ともに健康な成年男子をそのひな形とする自律的人間という伝統的な人間像を捨て、レヴィナスは、飢え乾くこと、老いること、傷つき病むことといった人間の受動的側面に目を向け、かかる受動性が可能にする倫理を人間性の本義として提示したのである。こうした独自の人間の思索を最も深化した形で提示するのが、1960 年代後半以降に展開される後期レヴィナスの思想に他ならない。

他方で、「人間」という主題は、同時期に活躍していたフランスの現象学者たち（ミケル・デュフレンヌなど）が共有するテーマであった。レヴィナスは彼らとの思想的対話を通じて、倫理的であることを本義とする独特な人間観を深めていったのである。しかしながら従来のレヴィナス研究では、同時代のフランス現象学とレヴィナスの関係については十分な検討がなされてこなかった。

本研究は、フランス現象学者たちの思索を本格的に検討し、現象学者たちの人間観がどのような布置を描いており、その布置の中でレヴィナスの人間観がどのような位置を占めるのかを探ることによって、後期レヴィナスの人間観の内実と独自性を明らかにするものである。これを通じて本研究は、「人間性とはいかなることを言うのか」という問いに一つの哲学的な応答を提示することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、人間性をめぐるレヴィナスの特異な思索、とりわけ 1960 年代後半以降に展開される、人間の受動性に着目しつつ他者に対して倫理的であることを人間性の本義として提示する後期レヴィナスの思索を、その内実はいかなるものであるのか、それはどのような仕方でも練り上げられたのか、その真の独自性はいかなる点にあるのかを解明することを目的としている。これを通じて本研究は、フランス現象学という 20 世紀の思想運動についての一つの歴史的研究を示すこと、そして「人間であるとはどういうことか」というアクチュアルな問いをめぐって哲学的に思索するための基盤となる知見を提示することを目指すものである。

3. 研究の方法

本研究は、上述の研究目的を達成するため、以下の二点を研究方法の柱とした。

(1)レヴィナスが主として 1960 年代後半以降に提示した、人間をめぐる思索はどのような内実を有するのかをレヴィナスの思想体系内面的に分析すること。

(2)レヴィナスが自らの思索を練り上げる際に思想的対話の相手となった、同時代のフランス現象学者たちの人間観の布置を描き、そこにレヴィナスの人間観を位置づけその独自性を探ること。

より具体的な作業としてはテキストの精読や資料調査等を行うが、その際、考察の主題として、特に「自然と人間の関係」および哲学的伝統において人間固有の特性とされる「自己性」の二点に着目し、学会での発表や学術論文の形で研究成果を公表した。

4. 研究成果

2018 年度（2018 年 8 月下旬以降）は、上記主題(1)「自然と人間の関係」をめぐって、後期レヴィナスが自然と存在の結びつきを強調する理由を主題としてテキストの精読を行い、その背景に、人間の主観性を「存在なき一」として提示する思考があるという見通しを得た。この見通しを基盤として、年度途中より、当初は翌年度の研究主題として計画していた、(2)「自己性」をめぐるレヴィナスの思索の分析に取り掛かった。後期レヴィナスにおける「自己」と「私」の区別と連関に着目し、時期をさかのぼって初期から後期までの時期においてレヴィナスが自己性をめぐってどのように思索し、またその思索を深めていったのかを追跡した。その結果、中期主著『全体性と無限』において提示される「自己のもとでの現前」という概念の内実を考察することを通じて、以下の三点を明らかにした。

(1)初期から後期までの時期においては自己であることと 私 であることが等しいものとして構造化されていること。

(2)その構造が、自らとの隔たりにおいて自らと一致するというものであること。

(3)そして『全体性と無限』においては「自己のもとでの現前」の概念の導入により、この構造が、他なるものとの関係を含みこむものとして思考されるようになること。

研究成果は学術論文としてレヴィナス協会の学会誌『レヴィナス研究』に投稿、掲載された。

2019 年度は、前年度の成果を承け、自己性をめぐるレヴィナスの思索の研究を続けた。「自ら

が話すのを聞く」という声の複合的現象を自己性の形象とみなす同時代のフランス現象学の主潮に鑑み、レヴィナスの後期著作において多用される音声に関連する表現に着目し、後期レヴィナスの自己性論を深く分析するための基礎作業として、口頭での他者との対話によって人間固有の知と理性的思考を基礎づけるというレヴィナスのテーゼの内実を、レヴィナスによる音の分析および記号とその意味作用の分析を検討することを通じて考察した。並行して、レヴィナスと同時代のフランス現象学者ミケル・デュフレンヌによる聴覚、音の分析を読解した。この研究の成果として以下の三点を明らかにした。

(1)レヴィナスが言語を、音がどのようにして意味をもつ記号としての語となっていくのかを考察するという仕方にとらえつつ、言語の記号性に理性的思考の条件を見出していること。

(2)レヴィナスにおいて、語は音である限り、それを発するものの他性を響かせるものとして記述されていること。

(3)レヴィナスの言語論は、音を他性と結びつけてとらえる点で、デリダ的な音声中心主義とは区別されること。(ただし、この点についてはさらなる検討が必要である)

以上の成果を2019年11月にレヴィナスをめぐる国際シンポジウム「個と普遍」においてフランス語で発表し、またフランス語の学术论文として日本哲学会の欧文研究誌『*Tetsugaku: International Journal of the Philosophical Association of Japan*』に投稿、査読を経て掲載が認められた。この研究成果は、レヴィナスによる記号の分析と音の分析とがどのようにに関連しているのかを明らかにしたものであり、音声関連表現に着目してレヴィナスの後期著作を読解していくための基礎的知見となる。

以上のように、本研究はレヴィナス研究としても、人間の自己性をめぐる理論的考察としても当初の計画を超える成果を得ることができたと言える。今後、これらの成果をさらに深化させ、単行本としてまとめて公刊する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 平岡紘	4. 巻 1
2. 論文標題 自己への現前 から 自己のもとでの現前 へ レヴィナスにおける自己性の問いをめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 レヴィナス研究	6. 最初と最後の頁 54-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroshi HIRAOKA	4. 巻 4
2. 論文標題 《 Le langage conditionne la pensee 》 : Le son et le signe chez Levinas	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Tetsugaku International Journal of the Philosophical Association of Japan	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Hiroshi HIRAOKA
2. 発表標題 Le son et le signe : une reflexion sur la pensee raisonnable chez Levinas
3. 学会等名 Colloque international. Le singulier et l' universel : Levinas et la pensee de l' Extreme-Orient (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----